

だった。

対空戦と復員輸送記

福島県 白井哲哉

昭和十八年十二月、二年間苦業を共にした戦車とわかれをつけ、陸軍船舶隊へ機関部要員として転属した。十二月末宇品船舶司令部にいたり、四月まで船用ジーゼルエンジンの教育がつづけられた。この間、香港で捕獲した豪華船で航海訓練をかねて瀬戸内海を往復し、神戸製鋼、大阪発動機、山岡内燃機、三菱造船所において船用エンジンの実地教育がおこなわれた。

五月、中隊編成、機動輸送第十二中隊付、私の部署は機械長であった。中旬になって艇受領の命令来たり、大阪藤奈瀉造船所にいたれば、なんと海軍S B艇でタービンエンジンであった。

急遽、呉より海軍下士官による蒸気エンジンの特訓が始まる。進水より機装中の二週間で概略の教育を終わら

試運転に立ち会い、大阪から宇品まで、海軍の指導による航海で泥縄式ではあるが、一応の訓練は終わった。

以後十一月まで瀬戸内海、横浜、釜山の航海で試行錯誤を繰り返しながらなんとか航行できるようになった。航海科の連中は、三角函数や六分儀のそうさに頭を悩ませていた。

昭和十九年十二月、前線出動の命が下る、門司出港せるも颱風に遭遇、五島列島福江港に難をさく。翌日出港、颱風余波にて波高十五メートル、四屯アンカー流失、雲多くして天測不能、くわえて海流を計算にいれなかったために、予定時刻になっても予定場所にとらず、あとで判明せしところによれば予定航路よりも百六十マイルずれていた由。

それに制海権なきため、敵潜に追われること幾度か、そのたびに砂浜に接岸し難をさく。

十二月六日高雄入港、南方進出にそなえ整備。以後当時の記録が残っているので、それを抜粋する。

一月九日

再度の空襲、グラマン八機、高雄港被弾八か所、田辺

上等兵上膊部負傷

一月十五日

○八：○○空襲警報発令、カーチマホーク八十機高雄上陸にあり、制空権なきため、悠々飛翔しあり。我が闘魂いやがうえにも昂揚、○九：○○海軍修理工場に対し急降下爆撃、この時我、機械室にあり、砲の発射音室をふるわす。パテのおちるあり、工具の散乱するあり、艇の火機、砲一門、機関砲二十門、火の玉となりてほうこうす、たちまちにして一斉射撃中止、とみるや一機撃墜伝声管を通じ来る伝令の声には歓喜の情があふれてい

る。
一月二十一日

本格的戦爆連合の大爆撃、本日B 24 三十、P 51 八十、高雄港に停泊せる艦船二十に損害あり、我々SB 一〇一は負傷者十三人、艇に損害なし。隣の甲型標準貨物船七千屯に被弾、煙突大破、船倉に積んであった爆雷が爆発し船体メチャメチャとなる。海軍SB 艇は船首に二メートルの穴があいた。高雄港は今やはいきよとなる。

大型船舶の無残な姿をみるにつけ制空権なき戦闘の悲

痛身にしむ。

聞くところによれば大型船に便乗せし陸軍部隊の死体加藤部隊前に多数累積せりという。

一月二十三日

我れ体調をこわし栄町高浜宅にて加療中二三：三〇空襲あり、高浜宅、隣家、向家に三発被弾、隣家、向家、爆発せるも我就床せし八畳となりの六畳の間に落下せるは不発、畳に五十センチの穴をあけたるのみ、どうしてこんな悪運が強いのであろうか。その後不発弾と五日間起居を共にしたがついに不発に終わった。

二月二十五日

本日B 24 百二十機来襲、無差別爆撃で本島人街全滅、死者三十、負傷者無数、夕刻市内巡察に出る。一面はいきよのなかになるいと死体横たわる。肉親の死体にすがりて号泣するあり、じつにこの世の地獄なり。

三月二十一日

一〇：三〇 グラマン百機、艇の上空にあり。

一〇：三〇 グラマン大型機八十機、艇の上空を北進

中

一〇・四〇 グラマンの三機編隊、我艇に突進ただちに応戦、先頭機墜落、敵搭乗員落下傘にて海上に落下。

一一・〇〇 敵搭乗員収容のためカッター離艇、やけどにて死亡せしため救命イカダ、救命胴衣、海軍ナイフ等没収して帰艇。

吾方の損害、赤井上等兵（砲手） 大腿部貫通即死、住口上等兵大腿部貫重傷、ほか十六人負傷二番重油タンクに被弾十センチの穴、一番タンクに切り替え、木栓で応急処置をなす。

九月十六日

愛艇一〇一号の引き渡し事務の手續きのため、広島市へ出張す。広島市の惨状言語に絶す。一面瓦礫の原にしてところどころに鉄筋、石の建築物の焼け残れるあり。電車通りの路肩には人骨の散乱（火葬場焼せしため電車通りで死体を焼いた由）。電車内は腐乱せし死体より発生せし蠅の真っ黒にたかれるあり。街中死臭ただよう。

船舶司令部は日曜にして不在、宇品町の萩山旅館に宿

をとり、東千田町の梅原宅（広島での小生の下宿先）をたずねれどあとかたもなし。となりの坂井宅（御夫妻に大変お世話になった）あとに貼紙あり中広町の飯村宅にいろを知りただちにたずぬ。和子嬢原爆病でふせていた。髪全部抜け落ち、歯ぐきより出血あり、意識はたしかにして我の見舞を大変喜んでくれた。両親は即死、姉と弟は勤めに家を出ていたがため、死なざりしという。しかし再びもとの身体になりそうもなし。必ずなおると元氣づけて帰るも心中あんたんたり。

御幸橋を渡りたるところより民家傾けど類焼をまぬがれ、萩山旅館も寝ながらにして屋層がみえるしまつ、ただ屋根の穴をさけて雨露をしのぐのみ、なんということであろうか、広島の後、日本の将来、あれを思い、これをうれい、転々として天明にいたる。

九月三十日

機動輸送隊は、外洋航海が可能ということで、復員は二年間延期、その間一般邦人、兵員を海外からの輸送に任ずと命令伝達あり。

それまでに不要になった砲隊、年配者、妻帯者を復員

させ、航行に差しつかえなきよう、万全の体制はとっていたが復員延期となるとさすが下士官、兵の動揺かくしがたく、説得するのになみ大抵の苦勞ではなかった。でもなんとか任務が遂行出来たのも、死ぬ時は一緒という連帯感がしんとうしていたことが一つの要因だったように思う。

当時、関門海峡は米軍が落とした浮遊機雷が日本海より流入し、ブイに係留中の艦船に接触し毎日何隻かの船舶がごう沈、あるいは座しようしていた。水先案内人も生命の危険をたてに水先案内をことわる状態であった。そんななか水先案内人なしで門司をでて、釜山へ向かった。勿論、敗戦となった今、死ぬことは、犬死であり、補償その他なんの確約もない時代である。

それだけに危険防止には最大の努力をした。機械室、機関室のハッチは全開、艇にあるだけの縄はしごを使用、全員救命胴衣をつけた状態で当直についた。觸雷の場合はただちにはしご及び縄はしごで甲板にあがる体制で望んだ。さいわい觸雷せずに済んだが、まったく薄水をふむ思いであった。

釜山に着き水の補給をたのめど、韓国人は戦勝国人の態度で法外な金額を要求し、心中憤激きよしがたい思いであった。

また保身上ピストルと弾丸五十発を所持していたが、釜山の水先案内（米人）を武装解除の検査官と勘違いしあわてて港内に放棄したのもあとで笑いのたねになった。

釜山港より邦人、復員軍人約一千人収容し帰路について、復員軍人の命令系統がみだれにみだれていた。連隊副官が連隊長の命に服さない現場をみ、怒り心頭に発して、

「そんな卑怯な奴は船に乗せられない。早急に下船せよ」

とどなりつけ、連隊長に感謝された一幕もあった。こっちはは乗せてやるという強みがある。中尉が大尉をどなりつけるのは痛快であった。そうした武士のかざかみにもおけない将校がいたことも事実である。

こうして門司は危険だということで、博多港に入港した。